

From Woman to Women

今号の話題

- 聞き書き「青春の町と暮らし」
- 精神科病院
- 「仮面と欲望」と私
- お知らせ・試写会より
- コーヒーブレイク

1992. 10. 20.

青春の町と暮らし

K・S

昭和二年、鹿見島県生まれ、65才。子供四人。結婚後、三人目の子供が生まれるまで生地で暮らす。1956年に島原へ。現在長崎市在住。

昭和元年は7日間だったから、私は昭和をキツキリ生きてきましたと話す木下さんから、戦時下の青春と暮らしを話してもらいました。

小さな知覧の町

知覧は小さな町だけど、税務所、地方裁判所、検察庁、法務局、国営の茶の試験場など、公官庁が集まっている町なんですヨ。私が小さい頃からありました。川辺郡の中で地理的に便利な場所だったんでしょかネ。山の上で峠を登りつめた町で、冬になるとたくさんさんの雪が降ってました。霜柱もバリバリしてました。小さなお城があった町なんですヨ。武家屋敷は代々住み継がれて残っています。今は観光名所になっています。

祖祖父の代までは武家屋敷の暮らしで、暮らしぶりが違って聞いたと聞いています。時代が変わってそんな暮らしでは生活できなくなり、家屋敷を売

り町の方へ移り住んで商売を始めたのです。終戦までは武家屋敷町との付きあいは昔どおりで、言葉の使い方から違ってしまいました。言葉づかいは、身分差をつけるものですからネ。まだ残ってましたヨ。叔父、叔母はいつも背すじをピツと延はしてました。父は町中で商売を始めましたから、嫌ってました。

子供たちを起こしもしなかった——
兄弟が多かったから（10人）母はみんなに仕事を分けていた。朝飯を作る者、豚の世話をする者、畑に出る者、学校に行く前にしなきゃならない。母は自分は早く起きているのに、子供たちを起こしもしなかった。寝坊をしたら朝飯はない、弁当はない。

学校の上に畑があったのヨ。学校に行く時に肥料を運ばんといかん時がある。子供一人では運べんから、小さい方が前に大きい方が後で担ぐんだけど、坂道だから後の方はピンピン飛ぶのヨネ。肥柵には飛ばんようにワラがかけてあるんだけど下手だから飛ぶのヨネ。学校に行く仕たくをした後でしょう。お前が上手にしないからピンピン飛

ぶって、ケンカしながら担いでましたヨ。

そうして育つてきたからネ、生きる自信というのか……どん底ってないように思うのヨ。

——女学校へ行きたい——

父は床屋をしていました。長男は高校に行きたかったのに、跡取りだからと床屋に弟子入りさせられたのネ。そういう長男を高校へ行かせなかつたから、兄弟みんな高校へはやらないと父は言つたの。皆、言う事きいて高校へは行かなかつた。私はお転婆で言う事きかない人だつたから、父に隠れて願書を出してネ。受験料だけは父に貰わんといけんから、言うたら叱られてネ。「お前なんかどうせ受からんやろうから、これ位なら損してもいいから、してくれたのヨ。……ハハハ、通つたのネ。

女学校は家賃料以外は男の先生でした。若い人はいないけど。英語の時間もあつたんですよ。ABCとかそれ位だけど。戦争に入つてからは、英語の時間はふりかえり、ナギ刃や勤労奉仕の時間にしてました。木刀のナギ刃で練習させられました。胸を突くと。英語に限らず知識として、必要

ないと思われた授業は、振りかえられました。

テストはあつたんですよ。今みたいにテストだからといって勉強する時間は家に帰るとなかつたですよ。畑や家を手伝つたりで。

一学年上までは伊勢神宮への修学旅行がありました。戦争が激しくなつて私の年には中止になりました。尋常小学校6年、高等女学校4年の10ヶ年間、一日も欠席しませんでしたから、卒業式には皆勤賞をもらいました。戦局が厳しい時でした。のび賞品は何もナシ。賞状一枚でしたヨ。

——あんた 床屋になりなさい——

知覧の特攻基地は有名ですが、戦時中は町の人たちには秘密にされていて、飛行場作りの労働奉仕で出入りはしていったものの、よく知りませんでした。女学校を卒業した19年には飛行基地はもうできていました。

卒業後友だちは代用教員で学校に残ったり、飛行場で働いたり、長崎の川棚へ女子挺身隊として行く人もいました。私も川棚を希望して手続きをしたけれども、校長が受けとつてくれない。校長は「今から男がいなくなるから、銃後は女が守ら

し入れをし、解雇はまぬがれました。労働条件は悪く、休みは日曜と祭日だけで、その月に祭日がない時だけ一回の半どんがあるという有様。風邪などで急に休むと一日休んだだけで安い給料から六千三百円も引かれます。就業規則をみせてほしいと言っても今だに見せてくれません。

看護婦の更衣室や仮眠室には冷暖房もなく、又窓には風が吹いて割れるので開けないようにという貼リ紙がしてあります。夏夏は、閉めきった部屋での扇風器は温風器に変わります。又、職員食堂にも冷暖房はなく、ハ工をはらいのけ乍ら牙も小さく食事もある有様です。こういう様は第三世界なみです。だいたい、患者さんを弱味につけて家で家族のやっかい者のようにあつかい、病度というイメージとはほど遠い劣悪な環境に收容しているのです。

まだ／＼日本の真の民主主義はほど遠く、もしかして宇宙よりも遠いのかもしれません。

「仮面と欲望」と私

N・S

かなり厚手の本なのに私には珍しく一気に読みあげてしまった。中村真一郎著「仮面と欲望」は文字通りの中身であり、「愛のなかの性、セックスのなかの愛、現代日本文学がはじめた描きえた崇高で過激なポルノグラフィ」と評されているごとく、「肉の欲望」を中心に愛の中身を問いかけている書簡形式の小説である。

往復書簡——なんとそれが七十歳の男と六十歳の女の問でかわされた書簡とは思えないくらい若々しい恋人同士のそれと同質だから、読み始めてしばらくの間は信じ難い思いがあるが、積んできた人生の重みと現在の欲望が表現されている両者の手紙を読み進めるうちに、あながち小説の世界だからと非現実的に捉える必要がなくなってしまう。今の自分の年齢から六十歳を想像してしまわず、今からいぶん年配の世代のように思えるが、これまで自分が生きてきた過程のようになまた年を重ねて六十歳になることを考えれば、小説の世界と自分の六十歳の人生が重なって「こんなふうには生き

れたらな。』と甘い夢の世界に誘われてしまう。

この本を讀むと、六十やも七十やも世間が思っているほど年寄の世界ではないと感じてくる。それほど二人の男女は精神的にも、また生き方においても若く、そして、自立している。いきなり六十やになるのではない。今まで生きてきた結果が自然に六十やにつながっているのだ。今まで遠くに感じていた老後の世界が、この本のおかげで急に身近に迫ってきた、しかもそれが「六十やになつてもこんな生き生きした人生がある。』と元気づけられることになった。「私も女を磨いとかなくっちゃあ。』というおしゃべりな気分にならせてくれる豊かな本である。

男は女に対する手紙の中で

「男女のあいだの愛は、性的交渉の繰り返すことによって発生する……。』

と断言している。青かつた若いころはそのこととかたくなに拒否し、精神的な愛から肉体的な愛へと発展するべきと信じて疑わなかった私だが、今はこの男の言葉に素直に深くうなづくことができ。会話でふれあう次元とは違つたところに性的

交渉によって得られるお互いの理解と信頼の世界がある。「男流文学論』の中でいみじくも小倉千加子が言っている。「セックスのある所には愛がある。愛がある所には何も無い。』この言葉に出合った時にはひとり大声で笑つてしまったが、奥に核心をついていると思つた。それと同じことがこの本の中で言われている。エロスの世界を共有することと男と女はお互いをますます好きになつていく。セックスを通してエロスの世界に浸れるかどうかは男と女の二人の関係性に規定されるが、そのことが見えてくるようになったのは三十半ばだった。女が男に依存している場合、あるいはその逆の場合でも、セックスにエロスを感ずることができない。一般的に言えるかどうかはわからぬいが、少なくとも私の場合はそうだった。男も女も自立した個人としてお互いに向き合い、お互いを所有し合えない関係において初めて、豊かなセックスが可能となる。

この本の中でもそのことがみごとに描かれている。男も女も双方それなりに自由な性的交渉を持ち、お互いがそれを認め合いながら二人の関係が

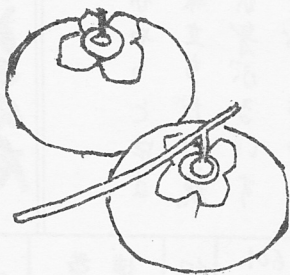
二十年近く続くという設定は、女がどんな男の所有物になることも拒否するという崇高な自我意識なしにはなりたない。恋愛という男女関係の中で二人がお互いの肉体の中に見つけたものは、結局は自分自身の姿だった。そういう恋愛のしかたにこそお互いを認め、自分を高めていけるものだということを、少なくとも自分自身に向き合っている者は確信することができよう。

人は恋愛をすること、否^{いや}否^やなく^くに自分を対象化せざるをえなくなる。苦しくて逃げ出したくなる時があつても、自分に向き合い続けることごと一つひとつ乗り越えていける。そして、自分が悩み抜いて勝ちとつたものは自分の血となり肉となりなっていく。そういう地道な作業を丁寧に繰り返すことで、私は気がついたら契に生きれる自分を発見していた。男との関係がすべてだと思ひこんでいたあの頃に比べれば、男との関係はたくさんある人生の契しみの中の一つだと感じられるようになった。今が、なんと元氣いっばい輝いていることか！ それもこれも自分自身について悩み抜いてきた長

い日々があつたからだろう。

楽天的に生きる楽しさを知つたら、人生なかなかやめられなくなるようだ。今でもこんなに楽しいのだからこの先もつと楽しいことに出会えるにちがいない。そう考えると年をとるのも悪くはない。小説の世界とは言え、六十代にしてこんなみずみずしい恋愛（もちろんセックスを含めその）を実現している女に出会つたことは、私に大いなる元氣と勇氣を与えてくれた。女が豊かな人生を送れるためには男にも元氣でいてもらわなくちゃ困る。

男たちよ！元氣な女たちに憶することなく、めいっばい男を磨いておくれ



長崎市女性センターの懇杯

アマランス

に決まりました。

センターの施設の利用申込は10月1日から始まっています。アマランスの意味はギリシア語で不死の花、常花とのこと。古代人の間ではアマランスが鮮やかに輝く紅色で咲き続けることから不死の象徴とされた。現在、初級ワープロ講座(※)も募集中、エコース計40人、テキスト代のみ有料で二千円とのこと。11月30日(月)から長崎大学の女性講師を招いて「アカデミー講座」予定。11月号の長崎の広報で詳細。どんどん利用しよう。どんな計画しよう。せっかく持った女性たちのスペース。

試字会より

口エロティックな関係は、内田裕也、ビートたけし、宮沢リエの出演作品。大好きな、たけしちゃんの映画なのでルンルンで見ました。ウーム、当日券千七百円も出してまで見たい映画ではない。でも、ひとときバリに行っただけ気分になりました。



coffee

とよと夜

高三の娘は卒業後の目標がやっと定まった。三月には長崎からの旅立ちだ。親もとを離れて一人での生活が身ぶるいするほど怖くて落ちこんでいたが、やっとのりこえられたようだ。悩み多かれ、そして悩んだ数だけ喜びあれと思う。(K)

Y したいこととして暮らす生活をしてきたが、ウーン、金のないのはいかんともし難い。どうやってこの壁をのりこえようかと思ひ悩む日々。時間があると金がなく、金があると時間が無いというこの世の法則からは逃がれるべくもないが、ま、体力がある分だけベターなり。主力の編集委員の家族に不幸があり、いいかげん人間の私の編集のため、ますます遅くなり読者のみなさん、ごめんなさい。(I)

発行所	長崎・女の会 「女の会通信」編集委員会	事務局	長崎市滑石1丁目4-1-601 栗山 洋子 気付 TEL 0958-46-7595	印刷	連帯 長船労組	No.	124
-----	------------------------	-----	-------------------------------------------------	----	------------	-----	-----